

第52回 日本農業賞 大賞 受賞
第62回 農林水産祭総理大臣賞 受賞
JAやさと有機栽培部会



『よりおいしい』 『より健康な』 『より豊かな』
食卓をお届けします！

～有機栽培部会スローガン～





JAやさと
有機栽培部会
部会長 岩瀬直孝

食を変えれば未来が変わる

JAやさと有機栽培部会が第52回日本農業賞「大賞」を受賞し、記念式典を盛大に開催できますことは、ご来賓や関係各位の皆様のご支援、ご協力の賜物であり、深く感謝申し上げます。

当部会は1997年に設立し、国の有機農業推進策が進められる以前から、有機農業に一往直前に取り組んで参りました。

当地域では「ゆめファームやさと」や「朝日里山ファーム」など有機農業を目指す新規就農者にとって安心して有機農業に取り組める環境をJAや行政機関などと一緒になって整えて参りました。

全国から就農希望者を招くことで、地域の活性化や地域コミュニティが形成され、有機農業の産地としても発展して参りました。

これらの取り組みが評価され、この様な大変栄誉ある賞を頂きましたのも、これもひとえに、JAや行政、生協・市場関係者や地元の皆様方の、ご理解・ご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

現在、部会設立から25年が経過しました。当部会では、有機農産物をより多くの消費者、特に子育て世代に提供できるよう、さらなる産地の拡大に取り組んで参ります。

私たち、JAやさと有機栽培部会は、食・農・環境の面を中心に持続可能な社会形成に貢献して参る所存でございます。

まだまだ発展途上ではございますが、先人たちのたゆまぬ努力と、関係各位のお力添えがあつてこそ、今の有機栽培部会があるのだと言うことを今一度胸に刻み、この度の受賞を励みとして、次の世代へ繋いでいけるよう、これからも精進することを、ここに宣言いたします。最後になりますが、日頃から支えて頂いている皆様に改めて感謝申し上げます。また、本日の記念式典にご列席頂いた皆様方の益々のご健勝とご多幸を心よりご祈念申し上げまして、御礼の言葉に代えさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



JAやさと
代表理事組合長
神生 賢一

大賞を受賞して

一粒の種が芽を出し、葉を広げ大きな花を咲かせました
今日は愛しみ育てた皆さんと共に成長を振り返り、日本農業賞大賞受賞を喜び、そしてこれからを展望する日です。筑波山麓の八郷盆地を管内とする当農協は一戸当たりの耕地面積もそれほど多くなく、少量多品目の営農がされてきました。

東都生協との出会いがきっかけとなり地域総合産直に取り組ん35年が経ちます。品目が変わっても、安心安全な農畜産物を届けようとする思いが有機栽培部会設立に繋がりました。雑草や害虫、病気との戦いがあり、それを先輩や仲間から知識を得て克服し、落ち込んだ時は励まし合いながら歩んできた25年だと思います。着実に部会を育てて、会員数31件、販売高も1億8000万円になりました。

国の「みどり戦略」の発表などで有機農業への社会的なニーズは高まっています。生産と供給、そして消費のバランスを取るなど、これからの課題はたくさんありますがそれもまた、理解ある消費者と生協、そして、やさと農協有機栽培部会が絆を強くして挑戦していきたいと思います。お集まりの皆様と関係機関のなお一層のご協力をお願いしご挨拶といたします。

① JAやさと有機栽培部会の設立経過と組織概要

- 1976年 東都生協との産直事業として、卵、ブロイラー、生シイタケ等の取引開始
～以降、取り扱い品目を拡大～
- 1995年 「やさとグリーンボックス（やさとの農産物詰め合わせ）」が、毎週、000
セット発送
- 1997年 「やさとグリーンボックス」の取扱いが半減
⇒ 新たなメニューとして「有機野菜」を盛り込む提案が高評価を得た
- 1997年 消費者が有機農産物に関心が高いことを確信し、生産者名で部会設立

② 有機栽培へのこだわり

～すべては、「安全・安心」な農産物を求める消費者のため～

条件：種まき 又は 植え付け前2年以上、化学物質に汚染されていないことを確認した畑で化成肥料、化学農薬を使用しないことが基本

- 農薬は使用せず、防虫ネットや輪作による物理的、耕種的防除を実施
- 2001年、部会全員で有機JAS認証を取得
- 地元の畜産農家から有機堆肥（家畜糞用堆肥）を入手し施用
- 現在、「竹」を粉碎、発酵させた堆肥化に試験的に取り組み中
- ゆめファーム・朝日里山ファームでの研修生は、研修開始とともに土づくりを開始

【基本理念】

1. 21世紀型日本農業の追求
2. 環境保全型農業のさらなる発展と地域農業の活性化
3. 生産者の主体性の回復
4. 安全で豊かな食生活のための食べ物の生産
5. 消費者への情報開示

【有機部会 栽培5原則】

1. 化学肥料は使用しない。有機肥料100%で栽培
2. 除草剤及び土壌消毒剤は使用しない
3. 化学合成農薬は使用しない
4. 輪作・緑肥を重視する
5. ゲノム編集、遺伝子組み換えされた種子を使用しない



③ 新規就農者 研修制度

- JAやさと有機栽培部会が設立され、就農希望者の受け皿が整ったことから・・・
⇒1999年 JAやさとが「ゆめファームやさと研修制度」を開始
- 研修生は、夫婦で応募が条件、有機農業を学び、栽培から販売まで自ら行う
 - ・ 技術指導は、部会の経験豊かな農家が指導役を担う
 - ・ 指導農家は、「メンター」として生活面の相談も対応
- 毎年一家族を受入れ、実践的な研修を2年間行った後、地域農業の担い手として送り出す
- 新規就農者の研修受入施設
 - ①ゆめファーム 1999年～ JAやさとが運営
 - ②朝日里山ファーム 2017年～ 石岡市
(業務委託先：NPO法人アグリやさと)が運営

【ゆめファーム研修の特徴】

1. 2年後に一人で栽培できる技術を確実に得るため、最初から研修用有機圃場で一人の農家として栽培を開始する。
 2. 研修用圃場は全て有機JAS認証を取得している。
 3. 農業研修に必要なトラクターや作業場などの機材や設備がそろっている
 4. 研修期間中の生活費（就農準備資金）を支援。
 5. 先輩農家が、週1回の研修を通して必要な技術を伝授。
- また、さまざまな勉強会も有機部会では 実施。



④ 地域循環型農業

～土づくりが最も重要～

- 地域の家畜糞尿や落ち葉、稲わら等を原料とした堆肥を施用し、有機物を利用した土づくりに取り組む
- 鶏卵生産部会や稲作部会、地元養豚農家等から糞尿や稲わらを調達
- 緑肥の作付け ⇒ 土壌微生物が繁殖しやすい環境を作る
- 今般の肥料高騰に耐えうる農業経営の確立
- みどりの食料システム戦略に沿った環境調和型農業の先駆的な取り組み



養鶏農家より堆肥を調達



米農家から稲わら・もみ殻を調達



緑肥が施された圃場



⑤ 販売活動に関して

～品揃えの充実を図るため～

- ・安定供給を図るため、年2回の販売計画、3ヵ月前の出荷・販売計画に基づく栽培
- ・規格・・・1袋当たりの重さを基準（一般的な、S・M・L、秀・優・良の区分はなし）

～有機野菜の販路拡大、認知度向上を図るため～

- ・有機野菜の良さを伝えるため、2021年より学校給食（地元小中学校）に食材提供を開始
- ・有機野菜の魅力発信、認知度向上を図るため、「石岡セレクト認証事業」へ参加

	春		夏			秋			冬			春
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
レタス												
グリーンリーフ												
かき菜												
小松菜												
ほうれん草												
かぶ												
だいこん												
短ダイコン												
にんじん												
長ネギ												
枝豆												
さやいんげん												
きゅうり												
なす												
ピーマン												
おくら												
ミニトマト												

（主要な品目の出荷カレンダー）



学校給食へ提供



ISHIOKA SELECT

いしおかセレクト



有機JAS認証取得 野菜として石岡セレクトに参加

⑥ SDGs及び交流活動

- 子ども食堂への食材提供、フードドライブ事業に参加
- 外部講師による部会内SDGs勉強会の開催
- 消費者との交流活動 種まきから収穫までの農作業体験を通じて消費者と対話
(新型コロナ感染拡大中は、オンライン形式で実施)
- 都市部の中学生を受け入れるグリーン・ツーリズムを実施
- 有機の輪の拡大・・・全国だけでなく、JICAを通じて世界各国から視察を受入
⇒ 有機野菜の魅力を訴え、産地化への助言



(消費者との交流活動)



(子ども食堂やフードパントリーに野菜を提供)



行ったつもりで農場訪問 〜はやさと 岩瀬さん編〜

YouTube



(勉強会の様子)



Instagram





JAやさと有機栽培部会

〒315-0116

住所：茨城県石岡市柿岡594-1

電話番号：0299-44-1661